

## 往還二種回向

——「証卷」における還相回向釈の意義——

籙 弘 信

『教行信証』「証卷」は、その題号「願浄土真実証文類」及び標榜の文「必至滅度之願 難思議往生」から知られるように、浄土の真実証の開頭、すなわち必至滅度の願の成就として衆生の上に成り立つ難思議往生、換言すれば、往相回向の心行を獲て即時に大乘正定聚の教に入った衆生に展開する仏道の内容をこそ、その開頭の主題としている。それでは何故、衆生に成就する難思議往生を開頭する上で、還相回向が問題となるのか。「証卷」の真実証の結核は、

夫れ真宗の教行信証を案ずれば、如来の大悲回向の利益なり。故に、若しは因若しは果、一事として阿弥陀如来の清浄願心の回向成就したまえる所に非ざることあることなし。

(定本Ⅰ・二〇一頁)

と語り、真宗が如来回向の教行信証の四法を内実として成立し、真宗開頭の課題がここで一旦完結していることが知られる。にもかかわらず、新たに段落を変えて(真蹟坂東本)還相回向釈を起すのは何故であるのか。往相回向の四法では真宗開頭に不十分であり、還相回向の詳説によって何かが補充されねばならないのか。それとも何か別の課題が始まっているのか。

先学によれば、往還二種回向は如来の本願力回向によって衆生に成就する二種の功德相であり、往生浄土に自利を、還来穢国に

利他を、それぞれ完全に満足するものと了解されている。この了解に立てば、二種回向の課題は往還いずれも衆生の二種相の証明として成立しないこととなる。しかし、そのような了解、いわゆる一回向二種相が、還相回向釈の課題を果して十分に語り尽くしているだろうか。私にはむしろ、この了解が形式化するあまり、自由な思索が阻害されているのではないかとさえ思える。

結論から先に言うと、私は、この還相回向釈の主題は、衆生の還相を説くのではなく、如来の還相回向、還来穢国の相を採った如来自身の自己表現としての回向を明らかにする事にある、と考える。還相回向釈に語られる還相回向とは、(如来)回向による(衆生の)還相ではなく、還相を採った(如来の)回向であると考ええる。この還相回向釈の意義を、『教行信証』全体に敷衍すると、「教卷」劈頭の真宗大綱の文

謹んで浄土真宗を按ずるに二種の回向あり。一つには往相、二つには還相なり。往相の回向に就いて真実の教行信証あり。

(定本Ⅰ・九頁)

を受けるものであり、前述の真実証結核が往相回向の総結でもあることを考え合わせれば、真宗とは、衆生に回向成就する教行信証、往相回向の四法をもって開頭され、還相回向釈は、その仏道を成就せしめる如来の回向そのものの説明を主題としていることが知られる。

今、その概略を述べれば、御自釈の後、『浄土論』出第五門、『論註』「起観生信章」の文によって、還相回向成就の具体相を挙げ、『論註』の「観行体相章」の不虚作住持功德の文から「利行満足章」の五功德門までの引文によって、還相回向成就の内幕を

語っている。その中の特に、不虛作住持功德以降の『論註』の文は、真実証積が衆生が浄土に生まれることを語るのに対して、一貫して、衆生を浄土に生まれしむることを語り、しかもそれが、ほぼ例外なく、敬語表現（「生ぜしめたまう」）を採っていることに著しい特徴がある。

これらの特色を視野に入れつつ、その文を概観すれば、還相回向の主体である浄土の菩薩とは、まさしく如来因位の法蔵をこそ暗示していると思われる。「浄入願心章」において、浄土の莊嚴が如来の願心の成就であり、それらは一法句（本願の名号）におさまり、莊嚴・名号いずれも法性より影現した方便法身であること、それ故に如来が「略して入一法句（本願の名号への帰入）」を説くことを明らかにし、「善巧摂化章」でその名号が、因位法蔵菩薩の五念門行の果徳として、衆生の往生の為に回施されることを示し、以下「障菩提門」「順菩提門」「名義摂対」によって菩薩巧方便回向成就の柔軟心の内実が智慧心・方便心・無障心・妙樂勝真心の四心で語られている。そして、「願事成就章」「利行満足章」において、菩薩は衆生を生ぜしめるために、四心をもって五念門を行じて、菩薩自身の上に五功德門、入出の功德を成就することを語られている。そしてこの入出とは、従来の了解のよう

な衆生の往還ではなく、

この五種の功德力、よく清浄仏土に生ぜしめて（入）出沒自在なる（出）なり。（一）内筆者、定本Ⅰ・二二〇頁）

とあるように、菩薩が衆生を浄土に入らしめ、菩薩自身が穢土に

応現する功德であり、その如来の入出の五功德門は衆生の一心と

して成就し、その一心に自然に衆生の五念門行の義が具わる。

このように見る時、「観行体相章」に説かれる浄土の菩薩、すなわち不虛作住持功德における得生見仏の未証淨心の菩薩が、畢竟して得証する平等法身の菩薩は、法蔵菩薩にこそその徳を見るべきであり、言わば法蔵還相の力用の象徴であると了解できる。

こう了解して初めて、真実証積の涅槃の列名の後に、

しかれば弥陀如来は如より来生して報応化種々の身を示し現わしたまうなり。（定本Ⅰ・一九五頁）

の文がある意味が明確になる。還相回向の『論註』「浄入願心章」において一如より来生した報身如来としての阿弥陀の莊嚴・名号が、そして「利行満足章」の菩薩の出第五門において、如来の還相回向としての種々の応化身がそれぞれ明確に語られている。

ここに還相回向とは、「難思議往生」の語で語られる浄土真宗の、仏道成立の根拠である回向の内景、すなわち法蔵菩薩の永劫修行成就をこそ開顯するものである事が知られる。還相回向とは、衆生を往生せしめる回向の法である名号の回施を、名号を衆生に開示する存在（応化身）の成就に包んで語った語であり、衆生は、出第五門の応化身との値遇において、如来永劫修行、五念門行成就の果徳としての本願の名号を信樂して、大般涅槃道に立たしめられる。ここに浄土真宗は、如来の還相回向を根拠とした往相回向の仏道として、完全に開顯されると言えよう。

そして、浄土真宗の、還相回向に支えられた仏道としての内実については、また別の論述の機会に譲りたい。